

令和7年4月8日 第1学期始業式

いよいよ、今日から令和7年度が始まります。それぞれが、新しい学年での決意を新たにしていることと思います。明日は、新入生が希望を胸に、門をくぐってきます。ついてくる世代に恥じないよう、上級生としての立派な背中を見せてあげてください。

皆さんが先輩たちから学んだことを、後輩たちに伝えてあげてください。これが伝統を受け継ぐということであり、創立125年目という、伝統校としての強みであると思います。

125年と一言で言いますが、本校の沿革史をひもといてみると、激動の時代に幾多の苦難を経て、今があることが分かります。1901年（明治34年）八幡浜が市ではなく町の時代、本県最初の商業学校として、西宇和郡立八幡浜甲種商業学校が、国に認可されました。

開校当時は、（今の商工会議所と市役所の間あたり）港町の豪商の民家を仮校舎として始まったそうです。その翌年、新川沿い（今のフジ八幡浜店あたり）にできた新築校舎に移転し、大正11年に現在の場所に移りました。

そして、戦後の1949年（昭和24年）に、高校再編成により、旧制商業学校、旧制中学校、旧制高等女学校の3校が統合され、県立八幡浜高等学校となって、今に至ります。当初、1200名いた生徒は、1カ所に収まりきらず、松柏校舎と大平校舎の2カ所に分かれて授業を行ったようです。

そこから75年、またもや市内3つの学校が統合し、大きく変わろうとしています。このような歴史に残る変革の時に、今ここで学ぶ皆さんは、いろいろと不便を強いられたり、移行措置に右往左往することもあろうかと思いますが、歴史の目撃者の一人として、この時を楽しんでほしいと思っています。

75年前、県立八幡浜高校としてスタートした時の一期生に、元愛

媛県知事の加戸守行氏がおられます。八高から東大法学部に進み、その後、文部省や文化庁で活躍された先輩です。もうお亡くなりになりましたが、現役知事の頃、創立 100 周年の記念講演で、次のような話をされました。

学校をつくる趣旨には三つあります。1 番目が「身を修める」、2 番目が「智を開く」、3 番目が「才芸を長ずる」としています。2 番目の「智を開く」とは学問を身に付けること、3 番目の「才芸を長ずる」とは才能を伸ばすということ、それよりも大切なのが、一番目の「身を修める」であると言われました。身を修めるという言葉は少々難しいですが、「人間として、自分の生きざまというものを、自分でコントロールできることである」と説明されました。何がよいことなのか、何が悪いことなのか、自分は人間社会の中でどんな役割を果たすのか、といったことを、学校における 1 番の目標として、明治以来、全国に学校というものが作られてきました。

ただ、現在では、1 番の目標である「身を修める」ということがおろそかになっているのではないかと思います。私の小さい頃は、「自分の心に鏡を持て」とか「お天道様が見ている」というフレーズをよく聞きました。「誰も見ていないときでも、太陽が見ているのだから正直に生きなさい」という意味です。自分の心に鏡を持たない人が世の中に増えていることは、少し残念に思われます。

その一方で、八幡浜高校は、「四国最後の清流」と言われるほど、清く澄んだ心を持つ生徒が多いと言われています。そんな皆さんですから、「こういうことをすると友だちが嫌がるかもしれないな」、あるいは「親が悲しむかもしれないな」と自分の心を鏡に映してみることができると思います。何がよいことなのか、悪いことなのかは分かっていると思いますので、皆さんには、将来、自分は社会の中でどんな役割を果たすべきなのかということを考えてもらいたいと思っています。そのためにも、しっかりと学問を身に付け、持てる才能を存

分に伸ばしてくれることを、切に願っています。

おわりになります。が、来年度には、いよいよ新制八幡浜高校がスタートします。今の八幡浜高校としては、3学年が揃う最後の年になるかと思えます。今の八幡浜高校のよさを、更に発展させ、新しい時代につなげてください。

皆さんには、八幡浜高校が目指す、一歩踏み出す勇気を持って、何事にも主体的に向き合うことにより、今年度を充実した1年にしてもらいたいと願っています。

一人一人の、更なる成長に期待し、式辞とします。